

暮想

くらそう



●プロフィール
久保田美香子さん(旧姓今野)
大学卒業後、文化新聞社に入社し、記者として活動。その後結婚を経て、今年6月に退職、12月に第1子出産予定。

飯能と被災地が
つながる元気市。

私は飯能生まれの飯能育ち。大学を卒業後、地域情報の発信を担う文化新聞社に就職し、記者として5年の日々が過ぎた。大学や高校の友人からは、まだ飯能から出ないの、などどこか批難めいた言葉を掛けられることも未だに度々あるが、何を言われようと5年の中での街の人との出会いが私の財産であり、生まれ育った故郷を心から好きだと言えることを誇りと思っている。

金子堅造さんとの出会いも然り。飯能のためにこの言葉を何度も近くで聞いてきた。堅造さんが取り仕切る元気市は第2回から取材が続いているが、「やる側も楽しくないという意味がない」と実行部隊の適当…いや、勢いのある奮闘ぶりに何度も驚かされ、微力ではあるが、実行部隊の一員として関わられてきたこと



第4回震災復興元気市／漁師さん自ら浜の味を届けに来てくれた。

は記者、人間としても学ぶものが多くあった。元気市前夜には、東北出店者や関係者などが集まり、いつもの居酒屋で宴が開かれる。福島県から毎年来ている海鮮どんぶり屋さんの女将さんが、手作りのどぶろく一升瓶を持ってテールを回る。その力強い笑顔に勇気づけられ、生きる力をもらっているのはきつと私だけではないはずだ。次回で5回目を迎える元気市。金子さん号札の元、また飯能がつになる。そんな瞬間を繰り返し間近で見ることができ、地元新聞記者になつて本当に良かったと思う。

特集 被災地訪問記

石巻市・白和山

仮設向陽団地

暮想 (くらそう)

久保田美香子さん

地域探訪

みいつけた!

震災復興元気市

あるから

人・暮らし 発見誌
【特別号】

arukara
November 2015 Vol.6



石巻川開き祭り(石巻市桃生地区に江戸時代から伝わる「はねっこ踊り」)写真提供:石巻ニューズ/武内宏之さん

編集後記 いいこと、あるかも

●「あるから」は、地域について考える冊子です。ボランティア先の地域に関心を深め、特別号としました。独り善がりになってないか不安もあったのですが、お話を伺った金子さんからも「そこが大事なんだよ」とエールをいただいたりして、発行までたどりつきました。石巻では、ピースボートいしのみまき、石巻ニューズをはじめとする皆様にも「お世話になりました」。

●「あるから」は、株式会社文化新聞社のご協力のもと、有志チームにて発行しています。企業団体で地域情報誌などの発行をご検討でしたら、当方までご相談ください。

サポーター募集

- 「あるから」は、飯能・日高周辺の歴史・文化・生活・地場産業を超・ローカルなアプローチで紹介する小さな冊子です。本誌は広告を取らずに発行しています。資金面・制作面でご協力いただけるサポーターを求めています。
- 当冊子に関するご意見・ご感想を下記までお寄せください。

発行/制作:あるからプラス

企画・執筆/石井 茂 TEL&FAX.042-973-4004 mail@ishii-design.info
グラフィックデザイン/黒田 靖 TEL.042-973-0272 jy9y-krd@asahi-net.or.jp
印刷協力:株式会社 文化新聞社 TEL.042-973-2525

地域をいきいき見せる。[企画・取材・制作・印刷]

この場所で培われてきた価値って、何だろう。
独自の歩み方「らしさ」を引き出し、どう伝えればいいのか—
当事者目線で、地域の発信力について考えます。

- 地場産業 ●商店街・店舗 ●企業 ●観光 ●地域活動

震災復興元気市

それじゃあ、やるしかない。

自分のためにやる。

あの日は箱根にいたそうである。交通機関がマヒしたので、小田原から帰れなくなったが、ある居酒屋のご主人の計らいで、急場を凌ぐことができた。小さな被災ではあったが、その時の温かな施しは、今でも忘れられない。それから東北の惨状を知り、居ても立っても居られなくなった。大した伝手があるわけでもなかったが、1か月後、炊き出しの道具を携えて、仲間とともに東北に向かう。

何かしなければならぬ。当時多くの人がそう思った。それを具体的な形で行に移せたのは、日頃からそうした姿勢を貫いていたからだろう。「まわりが良くなれば、自分も良くなる」が身上。祭りやイベントを仕掛け、若い頃から地域のために働いてきた実績がある。だから、支援への思いを伝えると、すぐに仲間は共感してくれ、動くことができた。

何かの役に立ちたい。

「震災復興元気市」は、震災の翌年から毎年埼玉県飯能市で開かれているイベント。金子さんが有志とともに仕掛けた。炊き出しでの活動が縁となった動きであり、大船渡、塩釜、気仙沼、石巻、いわきなどの東北各地から海産物を中心とした自慢の品々が運び込まれる。当初は「なぜ、飯能で」と思った人も多かったろうが、「何かの形で役に立ちたい」という気持ちは多くの人が抱えていたようで、予想をはるかに超える集客となる。

山間にある町でおいしい海鮮が食べられるとあつて、今では、それを目当てに周辺からもたくさんの方が集まってくるようになった。飽くまで「3.11を風化させない」がテーマであるのだから、飯能の人々の思いからはじまった取り組みが、何かを動かしはじめている。

求心力がすごい！

第四回目となる「震災復興元気市」に出かけてみた。人出は、何と3万1千人を数えた。驚くほどの盛り上がり。人出も多いが、地元の商品会議所や商店街をはじめ、市内の大学、高校、西武鉄道など、さまざまな機関・団体がイベントに合流し、多彩な展開となっているところも特徴的。会場も市内各所に広がり、いつの間にか市挙げの一大イベントになった。集客が大きいのは、何といってもメイン会場である中央公園。東北からおいしいグルメが集まっているのだ。

地域探訪 みつけた！

から、人気がないわけがない。それに加え、入間、川越、青梅など近隣地域のB級ご当地グルメが競演し、すごいことになっていた。

こうした被災地応援イベントはあちこちで立ちあがったが、4年たった今でもこのような規模で続けられているのは、全国的に見ても多くないという。乗り掛かった船から降りられない。飯能というのは、そういうところがあるまちなのである。



金子堅造さん

いただいた名刺の肩書には、「飯能商工会議所副会頭 農林商工連携特別委員会委員長」と記されている。農林商工連携ということは、あれこれ顔を出し、繋げてしまう人なのか。自分を「バカな男」と言い、話しているも、好奇心旺盛な態度が伝わってくる。名刺上部には、飯能の山並みにUFOが飛んでいる写真が掲載され、「美しい星」の奥むさし飯能=とある。株式会社金子組を率いる社長でもある。

イベントに参加!!

被災地営業努力中!

宮城県気仙沼市から毎年参加しているという元気な社長さんに話を聞くことができた。目下の課題は、加工施設などハード面の復興は進んだものの、数年間のブランクで顧客とのつながりが途切れ、仕事が動かなくなったこと。だから、東北の良さを全国の人に知ってもらい、東北の名産品を買ってもらうことを頑張らなければならない。呼ばれば、全国どこへでも出かけ宣伝している。

株式会社ハック取締役本部長

「気仙沼さん」(<http://www.kesennumanet.jp/>)という名で、ショッピングサイトを運営。気仙沼の特産品をネット販売している。



「石巻市・日和山」

良いまちで

あり続けられたい。

平穩を取り戻しているように見えるけれど、
未だ傷は癒えていない。
でも、いつまでも
こうしてはられないから、
「一つ課題をクリアしながら
前に進むしかない。
このまちの良さを
みんな考えてながら、
3・11以前と同じくらい
魅力的なまちになれば、
復興は、自ずと
向こうからやってくる。」



海を眺めるためにある。

日和山は、石巻駅から旧北上川方面へ商店街の只中を歩き、さらに南へ向かうとある。地元感にあふれた商店が軒を連ねる町の様子をながめながら辿るにはちょうど良い距離で、登り口付近にある石巻小学校まで15分とかららない。山というよりも、市街化されたその佇まいは、丘陵にひろがる閑静な住宅街といった方がふさわしく、行政上の地名も「日和が丘」と名付けられている。石巻小学校から日和山のつべんまでは、住宅街の中の舗装された道路を歩いて15分ほど。車を使えば、いとも簡単に上がれてしまう。

こう紹介してしまうと、特徴なく聞こえるが、頂上から眺める風景は、市街地のおおよそを知るにはこのほか好条件である。鹿島御児神社の鳥居が立つ南側は海へと広がり、震災時に甚大な被害を受けた門脇町・南浜町の荒涼とした様子が否が応にも目に入ってくる。現在、住宅地域や公園への復興整備が進められていると聞くが、新たな建造物や木々の緑は見られず、むき出しになっている土ばかりが目立つ。その向こう側に見えるのは、見た目には復興が進んだ石巻港の水産加工を中心とした工場群と碧き石巻湾の海原。神社からさらに奥に進んだ東側方面も開けて



頂上にある鹿島御児神社

おり、こちらからは旧北上川の流れとともに市街地の屋並みを眺めることができる。

歴史的に見ても、日和山は示唆的な存在である。江戸時代、石巻は北上川水運を利用して運び込まれた東北各地の米の積み出し基地として、千石船の出入りで大いにぎわった。石巻港から江戸へ送られた米は、最盛期には江戸市中で流通する米の3分の2を占めたほどであったというのだから、ハンパな量ではない。日和山は標高60メートルに満たない小さな山であるが、出航に向けた風向きや潮の流れを見るのに都合がよく、空模様つまり日租を見る山としてその役割を担っていた。日和山の名は、港町・石巻の成り立ちを表しているのである。

命の防波堤。

ほぼ町の中心にある日和山の丘陵地帯。震災時には多くの周辺住民が難を逃れたという。頂上へと続く鹿島御児神社の急な階段参道には、壊滅的な被害となった門脇・南浜地区からの避難民が列を成したそうである。南麓にある門脇小学校が津波が押し寄せ、多数の車が校舎とガレキに挟まれ、漏れたガソリンがあちこちで爆発した。その火は校舎にも燃え移ったが、同校の児童・職員および学校に避難していた住民らは、校舎2階から教壇を橋板として日和山の斜面に渡し、無事脱出することができたそうである。

このエピソードからも、7×8メートルとも伝えられる巨大津波の壁は、日和山にぶつかり止まったことがわかる。勢い余った津波は旧北上川沿いに市街地にも流れ込んではいるものの、中央1・2丁目あたりの津波の高さを示す看板には2メートル強の数字が記されているので、日和山以南と比較すると、その威力は格段に弱まったといっても良さそう。その昔、船が出航するにあたり空模様を見極めるのに役立った日和山の起伏は、このたびの千年に一度という自然災害時には、命の防波堤となったのである。

川村孫兵衛

石巻のヒーローといえば、石ノ森章太郎氏のサイボーグ009や仮面ライダーが挙げられるが、忘れてはいけない人がいる。日和山公園の片隅に銅像が建つ、川村孫兵衛である。駅前のストリートにモニュメントが並ぶマンガのヒーローたちに比べ、扱いが地味にも思えるが、郷土への功績の大きさは計り知れない。孫兵衛は長州毛利氏に仕える身であったが、初代仙台藩主・伊達政宗に治水土木の才能を見出され、家臣に抜擢される。そこで任されたのが、度々洪水を起こしていた北上川の改修工事だった。孫兵衛は総責任者として参加。工事費捻出のために自ら借財、現場での泊り込みなど、苦労話が像台座の説明板に記されている。この功績により、北上川は新田開発に欠かせない水源へと変貌。米作に適さなかった流域の土地が全国有数の米所となる。さらに、北上川は水運にも都合よく造られていた。仙台藩の米は北上川から日本一の消費地・江戸で商われ、石巻を米の一大集積地、東国最大の港町へと発展させた。つまり、彼がいなければこの街の繁栄はなかったとも言える。治水のスーパーヒーロー川村孫兵衛。彼なら石巻のこれらをどう設計するのだろうか。

家々が跡形もなく津波に持つていかれ、甚大な被害にあった門脇町で、キッチンカー1台で営業を続けていた店がある。店主は、津波に巻き込まれながらも流れてきた屋根根につかまり、辛うじて命拾いしているのだが、この場所への思いは強い。津波が到達するスピードが、あまりにも速くて間に合わなかった。何も考えず真っ先に日和山に向かっていけば、妻は助かった。」言葉が印象的だった。

石巻・花街・港町。



滞在中に何度か通った公衆浴場「つるの湯」。被災により一時は営業を断念しかけたが、常連客の要望と周囲のボランティアなど、全国各地から便りや寄せ書きが届いているようでした。

●つるの湯 / 石巻市住吉町1-8-43

日和(ひより)は、「何かをするのにちょうど良い」という意味がある。お散歩日和、洗濯日和というふうに使われ、意味するところも好ましく、その響きもチャームングなので、コピーライティングにも使い勝手の良い言葉だ。日和山の住宅地としての歴史は古く、海運や漁業関連で財をなした旦那衆が居を構えた、高級住宅地であった。「日和が丘」の地名は、昭和41年に付けられたようであるが、それ以前からハイカラな空気をまとった町であったことが想像される。石巻の港から世界へ飛び出し成功した人たちが好んで往処として選んだ場所であったし、旧市役所その他、裁判所や法務局、中央公民館、小中学校や高校があるなど、まさに市の中心地として機能していた場所でもあった。

に最も栄えていた市役所大通りへとつながり、ショッピングをするにも至極便利であった。海産物関連店はもちろん、肉屋、米穀店、酒屋、花屋、洋品店、靴屋、書店、電気屋、時計店、薬局、美容院、クリーニング屋、食堂、旅館、フルーツ屋など、時代時代で変遷こそあれ、生活に必要な店が揃っていた。また、広小路は、水路が流れ込み、川岸には柳の木が植えられているといった風情ある町並み。裏通りには港町特有の花街遊郭があり、停泊中の船乗りたちがこぞとばかりに遊んだ町でもあった。

中央3丁目の交差点にある旧観慶丸商店は、往時を偲ばせる。「観慶丸」は千石船の名前で、船名をそのまま店名とした。昭和5年に建てられたというその建物は、石巻初の百貨店として注目され、マイル張りの



駅前や商店街の様子はこんなでした。被災のことを忘れまいと、あちこちにメッセージが掲げられています。



丸みを帯びた外観にアーチ窓や丸窓が配されるなど、洋風建築らしいモダンな意匠がもてはやされた。今も、通りの周辺を歩いてみると、街灯や路地のいたるところに洋風な意匠が施されるのが見つかり、エキゾチックな港町の匂いを感じ取ることができる。

古き良き丘。

話を日和山に戻したい。周知かもしれないが、日和山と名が付くは全国に80か所あるのだそうだ。そもそも日和山には「日和待ちの船乗りが日和見をするために利用した港付

近の小山」という意味があり、港町とセットになっている山である。どれこれも、標高100メートルに満たない山ばかりであるが、仙台市の蒲生にある日和山などは、わずか3メートルしかない日本一低い山として名が通っていた。

古くから住宅地として開発された石巻の日和山であったが、今高齢化が進みつつあるという。旧市街地にあつた人のにぎわいが、高速のインターチェンジに程近い蛇田地区に移りつつあり、大型ショッピングモールを中心とした新しい街ができてきた。若い人の多くは、都会的で東京近郊と店



被災現場にこだわり、キッチンカーで営業を続けていた尾形勝寿さん。営んでいたラーメン店が全壊。跡地から奥様が愛用していた鉄製のヘラが見つかり、焼きそばの移動販売店を復活させたそうです。地元グルメを盛り上げようとB-1グランプリに参加し、入賞。石巻やきそば味平／石巻市住吉町1-6-20(現在の店舗はこちらにあります)

われることもあった。若い大学生ならともかく、僕のような偏屈なおじさんにも、そういうことをしてくれるのがうれしかった。それができるのも、ピースボートの活動がここの信頼をつなげているからと思う。

新聞配りを手伝うかわら、空いた時間には市街地を歩きまわった。たびたび足を運んだのは、宿舎にしていた場所から行きやすい日和山だった。朝のミーティングが始まる前に行ったりすると、日和が丘の住民が散歩をしていて、挨拶を交わしたりした。



おにぎりを買って帰るのが、異郷の地の小さな習慣になっていた。

坂の途中にある家々や教会や小さな喫茶店は、行儀よく並んでいてお洒落だし、大きく成長した木々はこの街の歴史を物語っている。日和山公園からの眺めも、石巻湾から吹いてくる風も、心地よかった。長い歴史の中で大切にされてきたものは、必ずその理由がある。変わらず居座り続ける日和山であるが、その価値は昔とどこも変わっていないのだろう。坂を下ったところにある通りのお弁当屋で、朝食にする

と同じような商品ラインナップを取り揃えたそちら方面をめざす。「年寄りには坂の上り下りが堪えるから、この辺りにも、ちょっとしたスーパーがあると、本当に助かるんだが、でも、道も狭いし、大きなものも建てられないよ山公園でお会いしたね。」日和山公園で出会った散歩中の初老の男性は、周辺の閑散ぶりを嘆くようにそう語った。住宅街に若い人が居つかないので、世代交代が進まない。

一方、この地を愛して止まない人もいる。中央二丁目で営んでいた飲食店が津波で被災し休業に追い込まれたものの、自宅のあった日和山公園近くで、仮設店による営業をすぐさま開始した。「不便は気にならない。日和山に住んで、通っては商売するのが僕の理想であり、願ひ。海の仕事をにぎわった石巻の発展は、この辺りから始まっているからね。」と主人。その言葉通り、元々の本店も以前あった場所のまままで再開するに至っている。

随分前のことらしいのだが、街の開発が進んでいた山の南側に抜けるのに、街の真真中に居座る日和山の存



在が邪魔になり、「トンネルを掘る」計画があつたと聞いた。効率優先の時代には、そういうこともあつたのかもしれない。

僕が石巻に来たのは、震災後3年が過ぎた頃。きっかけは、仮設住宅に新聞を配るピースボートのまきのボランティアだった。地味ながら粘り強く活動を続けているところが、僕の志向に合っていると感じた。新聞を月2で発行して、住民と会話をすることを念頭に配り歩く。話題は配達ボランティアの個性に任ざられて、話が弾むと、部屋に上がらせてもらう。この辺りの方言で「お茶こ」に誘

【仮設向陽団地】仮住まいの時間。

「仮設向陽団地」は、石巻駅から2Kmほど離れた場所に造られた団地である。周囲には大型のショッピングセンターやさまざまな店舗が立ち並び、買い物をするには便利な立地にある。団地内の雰囲気は明るく、元気にふるまう人が多い。部屋の前には鉢植えの花々が並び、殺風景になりがちな団地の通路を癒してくれている。角部屋に住まうあるおばちゃんは、整備した花壇の手入れに忙しい。「好きだからね。やりだすと、増えてしまっっちゃ。」やり始めは遠慮がちに花を植えていたが、前を通る人が「ご苦労さま。きれいですね。」などと声をかけてくれるので、張り合いがあるという。

このおばちゃんに限らず、花づくりが好きな人はたくさんいる。花ばかりか、ミニトマトやゴーヤなど、野菜づくりに精を出す人も。もともと広い庭がある家に住んでいた方が多いため、身の回りに花や緑が欲しくなるのだ。仮設住宅の狭い空間においては息苦しくなるので、屋外で植物の手入れをするのは、精神衛生上にもいいし、花づくりがきっかけとなって、ご近所さんとのやりとりも始まる。



この団地でも復興住宅に当選するなど、新たな住まいに移る人が出始めている。暮らす場所が定まり、ひと安心といったところなのだが、仲良くなった人とは、別れなければならぬ。それぞれ事情があるので仕方ないことなのだが、寂しい感じもある。数年間ではあるが、ここで暮らした時間は、その人にとって意味があるのではないかと。苦しい時期を乗り越えた戦友のような、そんな親交がその後も保てるといい。